全な平滑筋がみられるとともに一部の気管支腔には囊状様の部分も認められた。典型的でないもののCystic adenomatoid malformation（CCAM）との異同が問題となった。

7. 特徴的な中枢気道変病を呈し、心臓性黄疸を認めたサルコイドスの1例（伊藤武文、福岡和也、岡本利）

症例は26歳、男性。自覚症状はなかったが、2001年3月9日の検診の胸部X線にて異常陰影を指摘されたため、検査目的で4月24日当科外来を初診。肺部CTにて左上葉S11に浸潤陰影を認めたため、5月7日気管支造影検査を施行。左B111入流部に白色の小隆起性病変を認めた。同部で施行した生検組織では、上皮下に平滑筋への分化を示す粘液細胞が配列を示しながら増生しており、気管支平滑筋腫と診断した。

10. 気管支原発BAL（Bronchus-associated Lymphoid Tissue）リンパ腫の1例（小林厚、松本孝一、大内成美）

症例は54歳、男性。2000年11月健康診断で胸部CTで左S2に塊状影を指摘され12月当院紹介受診された。気管支鉱検で左B11に閉塞性表面潰瘍と、气管支造影にてリンパ腫の増生とリンパ腫形成病変を認めた。2001年2月27日左下葉切除術を施行し、摘出標本から気管支原発Non-Hodgkin malignant lymphoma、extranodal marginal zone B-cell lymphomaの診断を得た。気管支検断も陽性であり現在化学療法を予定している。BALTリンパ腫の肉眼所見はみずみずし透明感のある灰白色充実性腫瘤となっており、本症例もそれに合致し、比較的稀な疾患と考え報告する。

11. 気管支管腔造影にて硬化性血管腫と考えられた1例（斎木利彦、立花秀山、中村明彦、森田雅也、橋本隆彦、佐々木滋次郎）

症例は55歳、女性。健診の胸部X線にて左下肺野の異常影を指摘された。胸部CTで左S2に径8mmの造影効果のある境界明瞭な腫瘤を認め、肺の血管性変変を疑った。肺動脈造影では、病変部は造影されなかったが、気管支肺動脈造影で、いわゆるメロンの皮膚の造影所見が示されたことから硬化性血管腫と考えた。血沈などの症状を認めなかったので、外来にて厳重に経過観察中である。硬化性血管腫は中年女性に好発する比較的稀な疾患として知られている。考察を加えて報告する。

13. 当科におけるY型Dumonステント留置症例の検討（塚岡則、細谷光一、澤井聡、尾崎良智、寺本晃、鹿島洋、藤野昇）